

ポーランド
映画

講演会 & 上映



第74回
例会

久山氏の「講演会」(第74回例会) & 映画
上映3作品の「解説トーク」で映画を存分に
楽しむ2日間です! 是非お越しください。

久山宏一氏講演会 +

2月5日(金)

名作映画についての講演会

『灰とダイヤモンド』の成立と受容

(1958年、アンジェイ・ワイダ監督)



講師：久山 宏一 (ポーランド文化研究者)

日時：2016年2月5日(金) 18:30~20:30

会場：札幌エルプラザ 4F 中研修室(北8西3)

共催：  ポーランド広報文化センター
INSTYTUT POLSKI TOKIO

※ 入場無料、事前申込み不要



ポーランド映画不朽の名作『灰とダイヤモンド』について、ポーランド文化研究者・映画通であり、通訳としてワイダ監督とも親交のある久山宏一氏をお迎えして、語り合しましょう。

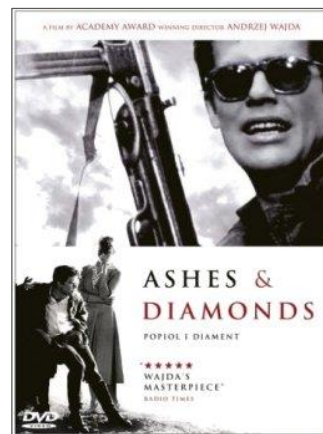
〈講演〉

1. アンジェイ・ワイダ(1926年3月6日生)が生きてきた時代 ~90歳の誕生日を一月後に控えて~
2. ワイダのフィルモグラフィ
3. ワイダ映画に描かれた第二次世界大戦
4. 映画『灰とダイヤモンド』概説
5. 小説『灰とダイヤモンド』(1948年、イェジ・アンジェイェフスキ作)概説
6. 『灰とダイヤモンド』~小説と映画の間~
7. 映画『灰とダイヤモンド』の問題
 - ① 「歴史」を「現代」として描く
 - ② 配役が決まるまで ~ズビグニェフ・ツィブルスキという俳優~
 - ③ 古典悲劇のように ~三一一致の法則~
8. 日本における小説・映画『灰とダイヤモンド』受容 ~大島渚を中心に~

〈質疑応答〉



(講師紹介)くやま・こういち 埼玉県生まれ。東京外国語大学ロシア語科卒業、早稲田大学大学院博士課程(ロシア文学)中退。ポーランド・ポズナン市アダム・ミツキェヴィチ大学より博士号(スラヴ文学)取得。専攻はロシア・ポーランド文学、ポーランド文化、比較文学。ポーランド語通訳・翻訳、東京外国語大学非常勤講師、ポーランド広報文化センター専門職員。



会がやって来る！

ポーランド映画祭2015 in 札幌 POLAND FILM FESTIVAL IN SAPPORO


2月6日(土)



2月6日[土] スケジュール

- 10:30— 開場
- 11:00— 開幕挨拶:駐日ポーランド共和国大使
ツィリル・コザチェフスキ閣下(予定)
映画解説トーク:久山宏一
- 11:20— 上映『エヴァは眠りたい』(12:55終了予定)
場内入れ替え
- 13:30— 開場
- 13:40— 映画解説トーク:久山宏一
- 13:55— 上映『約束の土地』(16:44終了予定)
場内入れ替え
- 17:30— 開場
- 17:40— 映画解説トーク:久山宏一
- 17:55— 上映『ヴァバンク』(19:44終了予定)

日時 : 2016年2月6日(土) 11:00~19:45
会場 : 札幌プラザ2・5(南2西5 狸小路5)
料金 : 一般1,100円、学生500円 (税込・各回入替制)

主催 :  ポーランド広報文化センター
INSTITUT POLSKI TOKIO ほか
後援 : 駐日ポーランド共和国大使館、北海道ポーランド文化協会ほか、配給:マーメイドフィルム

今回は19世紀のウッチを舞台にしたワイダの壮大な歴史劇『約束の土地』をはじめ、“ポーランド派”が活躍した1950年代から現代まで、ウッチ映画大学が世に送り出した貴重な作品群をご紹介します。ポーランド映画を支えてきたウッチの文化と魅力を、たっぷりとお楽しみください。

Ewa chce spać
エヴァは眠りたい



タデウシュ・フミエレフスキ監督 1957年 | 99分 | モノクロ | デジタル・リマスター版

開幕挨拶+解説11:00 ◆ 上映11:20~ 幻想とリアルを織り交ぜた、不条理でダークなユーモアとルネ・クレール風の抒情性をあわせつつフミエレフスキ(1954年ウッチ映画大学卒)の大ヒット作。娯楽喜劇として作られた戦後最初の作品と言われ、全住民が警官か泥棒という奇妙な町に若い娘エヴァがやってくる物語は、ポーランドの現実を暗示しているかのようだ。サン・セバスティアン映画祭グランプリ。

Ziemia obiecana
約束の土地



アンジェイ・ワイダ監督 1974年 | 169分 | カラー | デジタル・リマスター版

解説13:40 ◆ 上映13:55~ 70年代のワイダ(1953年ウッチ映画大学卒)は文学作品を数多く映画化しているが、なかでも国内外で高い評価を得ているのが本作。ヴワディスワフ・レイモントの小説をもとにユダヤ、ポーランド、ドイツという異なった民族に属する若き親友3人が工業都市ウッチで身を立てようとする物語は、青春群像劇であり、同時に富んだ大都市の肖像にもなっている。

Vabank
ヴァバンク



ユリウシュ・マフルススキ監督 1981年 | 109分 | カラー | デジタル・リマスター版

解説17:40 ◆ 上映17:55~ ウッチ映画大学を卒業後、70年代後半から活躍しているマフルススキの大ヒット作。30年代のワルシャワで刑務所帰りの詐欺師が再び悪事を働く犯罪コメディ。米映画の名作『スティング』を想起させる出来栄は一級品。ポーランドで知らない人はいないとも言われる本作は、同じキャストとスタッフで続編もつくられている。また主演俳優は監督の父親である。

《第74回例会報告》

久山宏一氏の講演を聞いて

越野 剛

当日は、50席ほどの小さな会場に40人近くの聴衆が集まり、ほぼ満席の盛会だった。

アンジェイ・ワイダの『灰とダイヤモンド』(1958)といえば銀幕全盛期の名作のひとつである。歳月を経た白黒の映像はこの映画が「古典」であることをいやおうなく感じさせるし、革命と戦争をめぐる深刻な政治テーマが語られるのであれば背筋をのばして観ざるをえない。しかし久山氏の講演は『灰とダイヤモンド』を撮ったワイダはまだ弱冠32歳の駆け出しの監督であり、「若々しさ」がこの作品の帯びるオーラであったことを明らかにしてくれた。

ワイダの映画が60年代の日本の若者に受けたのは、なによりもツイブルスキが演じる主人公マチュクがカッコよかったからだという。サングラスをかけ、酒場でウォッカに火をつけ、ゴミ捨て場でのたうちながら死んでいく。それらの身振りにはちゃんと理由があるのだが(黒メガネは下水道でのパルチザン

戦で目を病んだから、火酒を燃やすのは死んだ戦友の追悼のため)、そうした文脈を切り離してマチュクの演技は模倣の対象となっていく。大島渚、吉田喜重など60年代の日本映画や、ゴダールなどの外国映画から豊富な例を引いて、久山氏は当時の俳優たちが『灰とダイヤモンド』を真似、そこからカッコよさを抽出したありさまを見せてくれた。これまた若いころの大島渚がワイダについて熱く語る珍しい映像も観ることができた。

ワイダは画面の動きとモノの配置にこだわる構図絶対主義者だったという指摘も面白かった。私のような素人鑑賞者にはとても気がつきようもない点だが、疾走する列車の向きが次の場面で逆になったり、登場人物の位置関係が矛盾したりしているという。久山氏はそれを若いワイダの未熟さではなく、物理的なリアリティよりも映画という動く絵の構図の美しさを重視したからだと喝破する。

久山宏一氏はポーランドの文学と映画の専門家として知られ、大胆な仮説を豊富な引用と分かりやすい言葉で解き明かす手法には定評がある。翌日はポーランド映画祭で解説者を務めるという多忙なスケジュールのなか、本講演を引き受けてくださったことに感謝したい。(こしの ふう)

《第75回例会報告》

新井藤子氏の講演を聞いて

岩浅 武久

新井さんの講演はかなり特殊なテーマかと思われたが、土曜の午後に30人近い聴衆が集まった。

講演ではまず1900年パリ万国博覧会の映像資料が紹介された。これは確かに珍しいもので、エジソン社が撮影した「動く歩道」の動画その他のパリ万博の映像に文字どおり目を奪われた。

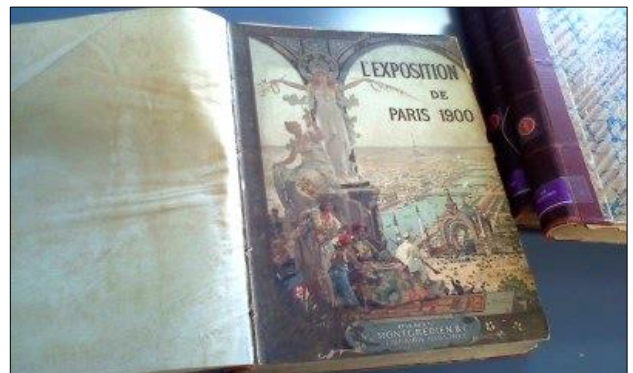
つぎに紹介されたのが、パリ万博の「ロシア・シベリア展示館」内部の写真。これは *L'Exposition de Paris* (1900) 3vol. (オリジナル版とその復刻版) で確認された「ニヴフ展示」画像と、新井さんが米国スミソニアン博物館から受領したデータで確認したステレオ写真の「ニヴフ展示」である。

それがサハリン・ニヴフの衣服や道具であるとする新井さんの推論は、画像から十分に納得できるものだった。今後の研究によって、ピウスツキがパリ万博に向けて準備した展示品のリストが解明され

たとき、パリ万博に関するピウスツキの業績の全体像とその意味も明らかになったと言えるのだろう。

パリ万博のニヴフ展示の紹介は非常に興味深く、これに関わるピウスツキの姿が目につかぶ思いがした。ただ講演案内にあった「ピウスツキの生い立ちや業績を通して、日本の何がわかるのか、北海道は彼とどのように関わったのか、その民族研究は日本の民族のあり方のどのような面を明らかにするのか」という課題について、会場で十分にお話を聞く時間がなかったのは残念だった。

(いわあさ たけひさ)

パリ万国博覧会百科事典 *L'Exposition de Paris*, 1900 原典

第74回例会講演要旨『灰とダイヤモンド』の成立と受容

久山 宏一

1. アンジェイ・ワイダ(1926.3.6-)と三島由紀夫(1925.1.14-1970.11.25)は同世代で、ともに戦争を直接経験してはいない。三島は徴兵検査に合格したが、入隊検査ではねられ帰郷した。ワイダは自分の「最初の三本の映画は(戦争の)困難な過酷な経験が私の脇をすり抜けてしまったことに対する一種の埋め合わせなのです」と語っている(「ワイダとの対話—その意図と作品について」)。三島は45歳で自決し、ワイダは90歳の「高齢ながら矍鑠たる老人」になったが、戦後日本文学の最高傑作『金閣寺』(1956)は弱冠31歳の若者によって、ポーランド映画の最高傑作『灰とダイヤモンド』(1958)は32歳の若者によって創られたことを忘れてはならない。

2. 表題について:映画はアンジェイエフスキの同名の小説にもとづき、表題はノルヴェイトの詩からとった「永遠の勝利のあかつきに、灰の底ふかく／さんぜんたるダイヤモンドの残らんことを」という句に由来する。その含意は「敗北者・挫折者であるあなたは、灰になるかもしれません。しかし、そのあなたの中にもダイヤモンドが隠れているのです」という、一種の「敗北の美学」とみることができる。

3. 作品の特徴——構図絶対主義:ワイダは画面の構図を第一に考える「構図絶対主義者」といえる。シュチュカを追うマチェクがいつの間にか相手を追い抜いていたり／追われるマチェクの背後の高架線上を走る機関車の進行方向が次の場面では逆になっていたというモンタージュの誤りも、その面目躍如といえるだろう。

マチェクとシュチュカとその息子マレクが同じ方向を向く／クリスティナとマチェクの最後の出会いの場面で二人は画面上手→下手へ移動／ポーターとマチェクが画面左上へ移動など、構図・動線による「ドミナントのモンタージュ」も特徴的である。

4. 「歴史」を「現代」として描く:ワイダはこの映画で、あからさまに現代風の要素を画面に持ち込んでいる。今では1945年と1958年の風俗の差は掴みにくいかもしれないが、ためしに、同じ45年を描いても、俳優たちが58年の服装でカメラの前に立った『灰とダイヤモンド』のマチェクとクリスティナと、45年の服装を再現した『カティンの森』(2007)のタデウシュとエヴァとを比較してみれば、ツイブルスキの「ノンチャランス、服装、黒眼鏡、身振り」がいかにか「現代的」だったか、一目瞭然だろう。

「映画を撮り始める時、ツイブルスキはすでに準

備万端の状態にあった。朝七時にヴロツワフに現れた彼は、八時一五分、いよいよ撮影開始だという頃になっても、到着した時の服装のままだった。その頃流行っていたテニス・シューズ、細めのジーンズ、緑のジャンパー。もちろん、文句はいえたが、この世代のことは、私より彼の方がよく知っていたかもしれない(『映画と祖国と人生と…』第5章)

ツイブルスキは『灰とダイヤモンド』の前年にパリに滞在し最新のアメリカ映画を観ていて、間違いなく、マーロン・ブランド、ジェームズ・ディーンなどアクトーズ・スタジオ系の俳優に影響を受けていた。

5. 多くの模倣者たち:『灰とダイヤモンド』のあとには、数多くの模倣者たちの列がつづく。ポーランドでは、クシシュトフ・ケシロフスキ監督(1941-1996)『アマチュア』(1979)をはじめ『灰とダイヤモンド』への暗示を含む映画は10数本に上るといえる。

フランス・ヌーヴェル・ヴァーグの旗手ジャン＝リュック・ゴダール監督(1930-)『勝手にしやがれ』(1959)のラスト、主人公の逃亡と死のシーンと『灰とダイヤモンド』のラストとの類似は偶然とは思えない。

6. 日本の模倣者たち——1960年ころ:マチェクの死や、アンジェイとともにグラスのウォッカに火をつけてパルチザンの戦友を偲ぶ場面など印象的なシーンは、政治的・イデオロギー的な内容を離れて、日本でも多くの模倣者を獲得した。

(1)大島渚(1932-2013)『青春残酷物語』(1960)では、バア「クロネコ」の場面で真琴(桑野みゆき)がジンに火をつけて燃やす。ワイダ作品は日本の若者たちの間にツイブルスキ・ブームを引き起こし、真似してアルコールに火をつける者が続出した。映画中の清(川津祐介)も、そうした学生の一人である。「あんたが教えてくれたんじゃない」という真琴の台詞はそれを示している。ただし、真琴がジンに火をつけるのは恋の成就を祝うためで、ワイダ作品とはまったく逆の意味である。

「個々の断片(ショット)をそれらの圧倒的(主要)な特徴によって互い連結する」「ドミナントによるモンタージュ」(エイゼンシュテイン)の手法があちこちで使われ見事な効果をあげている——クリスティナが手を引っ張られて画面の右→左へ動くショットのすぐあとに、マチェクが分厚い石壁の前を右→左へ走るショットが続く／ホテルのポーターがポーランド国旗を持って画面の左上方向に斜めに歩くショットの次の画面で、ゴミ捨て場のマチェクが右下→左

上に向かってよろめき歩く。

同様の美しさに輝くモンタージュが『青春残酷物語』のラストにもある。大島は、車に乗っている真琴と、線路ぞいの空地でリンチされる清をカットバックでみせ、清の死を直感した真琴が左を向くショットと、清の顔が左に倒れる動きを重ねてみせるという、『勝手にしやがれ』へのオマージュも感じられる)華麗な「ドミナントのモンタージュ」を行っている。

『太陽の墓場』(1960)で、ヤス(ツイブルスキを真似て黒いサングラスをかけている)がゴミ捨て場でマチュクそっくりの死を遂げる場面については、すでに平野共余子が指摘している。ただし、その描き方は、ワイダ独特の過剰な比喻性をはぎとり、人間の死をあくまでも生物的に描いてやろうという大島の意図が感じられる。

大島はワイダ夫妻を招いて1980年に東京で行われたシンポジウムの席で、『灰とダイヤモンド』からの影響について、次のように語っている。「俳優たちも、相当の影響を受けています。私の初期の映画『青春残酷物語』とか『太陽の墓場』とかでは、男の役者が死ぬときには、だいたいみんなチブルスキーの真似をしています。私が真似をしろうといったわけではけっしてないんですが、たいていの役者がチブルスキー風にひっくりかえるんです。これは、ただかっこうだけの真似ではなくて、そういう歴史がもったある重みというものを受けとめたときには、ああいうひっくりかえりかたをしなきゃいけないんじゃないかと俳優が思ったんだろうと思います。」

(2)吉田喜重(1933-)のデビュー作『ろくでなし』(1960)の主人公北島淳(津川雅彦)が「ピストルで撃たれて、街頭をよろめきながら歩く姿」は「フランス・ヌーヴェル・ヴァーグへの共感として、『勝手にしやがれ』のラストシーンを模倣した」ものである。「それを演じた津川雅彦君はゴダールの映画を見ていましたから、ジャン=ポール・ベルモンドと同じようによろめきながら歩いた」(吉田)。注目すべきは歩いたあと崩れ落ちて牧野郁子(高千穂ひづる)に抱きかかえられるショットで、これは撃たれたシュチュカがマチュクに抱きつくシーンの模倣だろう。津川はゴダールだけではなく、ワイダの映画も見ていたようだ。その証拠は、彼が再び主演した吉田の第3作『甘い夜の果て』(1961)のラストシーンにおける、ツイブルスキの哄笑の模倣である。

7. 日本の模倣者たち——1967年以降

ズビグニェフ・ツイブルスキ(1927.11.3 生)は1967年1月8日早朝、ヴロツワフ駅でワルシャワ行きの列車に飛び乗ろうとしてホームと列車の間に落ち、轢死した。これを機に第二次ブームが起こる。

(3)藤田繁夫(敏八)(1932-1997)は大島や吉田と同世代だが、長編映画監督としての独立はいわゆる「松竹ヌーベルバーグ」に属する二人より10年近く遅れた。オリジナル・シナリオに基づく処女作『非行少年 陽の出の叫び』(1967)では、8年前に公開された『灰とダイヤモンド』からの影響が顕著で、ほとんどパロディの域に達している。

主人公の純(平田重四郎)は更生を誓って少年院を出ると、まず黒いサングラスを買いに行く。タイトルバックに、サングラス越しに太陽を見るまでのスケッチが展開する。中盤で、昔の仲間が純を待ち伏せナイフで脇腹を刺す。傷を負った純は自分の部屋に戻り、積んである古新聞紙を千切ってゴミの山を作り、その中に身を埋める。まるで主人公は死ぬならゴミ捨て場に限り、無いなら自分でゴミ捨て場を作らねばならぬと心に決めているかのようだ。

(くやま こういち、講演原稿に基づく要約)



『灰とダイヤモンド』『勝手にしやがれ』『青春残酷物語』